

## 滋賀県環境審議会 水・土壌・大気部会 議事録概要

### ○開催日時

平成 23 年 11 月 18 日（金） 10:00～12:00

### ○開催場所

滋賀県庁東館 7階 大会議室

### ○出席委員

川地部会長、石津委員（代理）、小栗委員（代理）、笠原委員、上総委員（代理）、亀田委員、北出委員、鳥塚委員、長尾委員（代理）、中村委員、西田委員、和田委員（全 17 委員、出席 12 委員、欠席 5 委員）

### ○議題

- ・第 6 期琵琶湖に係る湖沼水質保全計画（答申案）について
  - ・その他
- 

### □ 第 6 期琵琶湖に係る湖沼水質保全計画（答申案）について

事務局から説明後、以下の質疑等がありました。

【上総委員(代)】 全窒素の水質目標値が対策なしでも下がっている理由は何でしょうか。また、浄化槽の整備人口が、10万人から3千人に減少するとすると、数が合わないと思いますがいかがでしょうか。

【事務局】 先に2つ目のご質問についてお答えします。浄化槽の整備人口が5年後に3千人になるのではなく、新規に浄化槽を使われる方が3千人増えるという意味になります。

【上総委員(代)】 平成27年度に10万3千人になっているということでしょうか。

【事務局】 下水道への移行もありますので、新規で3千人増があったとしても、おそらく10万人より減少すると考えています。

【上総委員(代)】 平成27年度の浄化槽の整備人口を想定しなくても計算ができるのでしょうか。

【事務局】 シミュレーションは、「滋賀県汚水処理施設整備構想2010」の基礎データをもとに計算しています。これは、集落ごとに、将来の汚水処理形態が、下水道か、農業集落排水施設か、合併浄化槽なのかを住民基本台帳人口で計画されているものです。これに、接続率を乗じたものでシミュレーションの計算を行っています。

- 【上総委員(代)】 計画書に記載される浄化槽の整備人口は、これでいいということでしょうか。
- 【事務局】 湖沼計画の目標値としては、平成27年度時点で浄化槽を使われている人口ではなく、新たに浄化槽を使い始められる人口としております。
- 次に1つ目のご質問についてお答えします。主に2つの理由があると考えています。1つは、県全域では人口が増えることとなりますが、北湖流域では減少傾向にあります。そのことで、負荷量としては対策なしでも南湖ほどは増えないと考えております。もう1つは、窒素濃度の推移をみると、流入負荷量の削減効果が遅れて表れてきており、その傾向が続いているのではないかと考えております。
- 【笠原委員】 この計画には、「はじめに」がありませんが、入らないのでしょうか。
- また、第3章の赤野井湾流域対策に、第1期という表現が出てきます。湖沼計画と区別が付くような表記にされた方がいいと思います。
- 【事務局】 第4期計画までは第2章が「はじめに」として記載されていましたが、これまでの事業の実績や水質の状況を記載した方がいいということで、第5期計画から現在の構成にさせていただきます。
- 赤野井湾の期数の表記については、区別が付くように修正します。
- 【北出委員】 赤野井湾流域対策の第1期の評価では、水質の改善はみられていないと思います。同じように第2期として記載されている事業を行っても改善するのか自信が持てないでいます。内湖による自然浄化対策は、かつて溜まったヘドロを循環利用していたことも踏まえて、対策を行っていく必要があるのではないかと考えています。
- 【事務局】 問題意識として持っているところです。これまでは湖沼計画に基づいて、25年間CODと窒素とリンの負荷削減を行うことで環境基準を満たそうという取り組みを行ってきました。時代の流れで修正も入り、生態系といった視点も入ってきていますが、基本的な枠組みは同じです。
- 長期ビジョンである「マザーレイク21計画」では、COD、窒素、リンという枠だけではなく、琵琶湖の水環境、暮らしとの関わりを柱に据えていますので、例えば仰った循環利用を前提とした内湖の浄化作用などについては、考えていきたいと思います。
- 【和田委員】 廃棄物処理施設の粗大ごみ処理施設の処理能力が平成27年度の目標で減少しているのはなぜかということと、水質予測でプランクトンの成長戦略をどう設定しているかについて、お伺いします。
- 【事務局】 粗大ごみ処理施設については、昨今の再資源化の推進によりまして、粗大ごみの量は削減傾向にあるということで、処理能力が減っています。一方で、資源化施設は、処理能力を増やす方向で目標が立てられています。

す。

もう一点の植物プランクトンについては、植物プランクトンの体が炭素、窒素、りんで構成されますが、窒素やりんがある程度過剰になると取り込まなくなります。そのパラメーターをC/N比、C/P比としてモデルに入れていますが、将来の窒素やりんの削減量、場所の違い、季節などを反映させて水質予測を行っています。

【中村委員】 赤野井湾流域対策について、この5年間で湾内の水質がほとんど改善されていないので、何らかの具体的な策を入れるべきではないかと思えます。

水生植物の刈り取りで湖流の回復を図るとありますが、湾内にはハスが8割近く手付かずで残っている状況です。このハスの一部だけを刈り取るというのでは、対策として乏しいと考えています。

【事務局】 湾内対策の課題は湖流の回復ですので、具体的な事業については5年間でできる限りの対策を位置付けてまいりたいと考えています。

【鳥塚委員】 平成22年度のりんが極端に跳ね上がっている原因は、大体の予測として理由が分からないかということと、1997年以前はTOCを調査していなかったというだけでなく、同じ2000年頃の窒素とりんは高い数値であるし、この時分は琵琶湖の資源も豊富で、資源再生にも十分な道筋があったわけだが、それ以後、窒素とりんが下がってきて、資源再生がうまくいっていません。食物連鎖の底辺であるプランクトンが、生態系の中でその役割を果たせていないのではないかと、異常が起こっているのではないかと考えています。次回、見解をお聞かせ願いたいと思えます。

また、9月の台風12号の後、西浅井から今津地区の間でアオコが大発生しました。さらにその後、野洲川の川尻から和邇沖までと琵琶湖大橋下流までの一体とその以前に琵琶湖東岸部において、アオコが大発生しました。濃度は非常に低くありましたが、広範囲に発生しました。12月から稚アユの網を入れるけども、網が1日でどろどろになってしまうのではという不安があります。水産試験場は、台風によって流水が多いことが原因ではないかということでしたが、漁師からすれば水の入替わりが多くなるので、逆に良くなるのではと思っていますので、逆に悪くなったという説明はおかしく思えます。改善計画を立てるといっても、現場と乖離したと解釈せざるをえませんので、深刻に受け止めてもらって、改善対策を急いでもらいたいと思えます。本日このように報告しないと、現場のことが委員の皆様には伝わらないという思いもあります。

また、下水の塩素殺菌だけは別の代用品に替えていただかないと、魚

が沿岸部に寄りつかなくなります。改善策を考えて欲しいと思います。

【事務局】 我々は琵琶湖の現場に出て調査をしていることはありますけれども、日々の琵琶湖の状態をよく知っておられるのは漁師の方々だということも理解しています。

この計画では、特にCODや窒素、りんに絞って評価していますが、今の琵琶湖の状況、あるいはこれまでにどのように琵琶湖や魚の状況が変わってきたのかということ、時系列を追って確認していく場を、マザーレイク21計画のプロジェクトとして進めていきたいと考えております。

ぜひ一緒に考えていただきたいと思いますので、ご協力をお願いします。

【川地部会長】 それでは、本日出ました質疑、ご意見はできるだけ計画に取り入れていきたいと思います。その作業は事務局と私とで調整し、答申としてとりまとめたいと思います。